

「わたしの髪があなたのウィッグに！ One Wigプロジェクト」事業

髪を失った子どもたちに再び笑顔が戻るように
オーダーメイドの医療用ウィッグを無償で提供し続ける

病気や事故で突然、毛髪を失ってしまったとしたら、どんな気持ちになるだろうか。大人でも冷静に対処することが難しいが、それが学校に通う子どもたちなら、なおさら動揺が激しいに違いない。そんな子どもたちのために、一般から髪毛の寄付を募り、フルオーダーメイドの医療用ウィッグ(かつら)を製作し、無償で提供している日本で唯一のNPO法人が大阪にある。

子ども用の医療用ウィッグがない状況を
打開するためのオーダーメイドウィッグ

大阪市の市営地下鉄御堂筋線中津駅に程近いところに、一軒家を改装した洒落た美容室がある。その2階に足を運んでまず驚いたのは、段ボール箱にびっしりと入った人の髪毛の束。ここは、小児がんの治療や先天性の無毛症、突発的な脱毛症、あるいは不慮の事故などによって髪を失ってしまった18歳未満の子どもたちに、オーダーメイドの医療用ウィッグ(かつら)を無償提供する「One Wig」という活動(そのウィッグ自体の呼称でもある)を続けている「Japan Hair Donation & Charity」(以

下、JHDAC)のオフィスである。

事務局長を務める美容師の渡辺貴一さんによれば、「大人用はS、M、Lなどの規格があるが、子ども向けの医療用ウィッグは数種類もほとんどないのが現状」なのだという。

「あったとしても、いかにも人工毛で作ったことがわかる不自然なもので、ヘアスタイルなどの選択肢もありません。人毛のものをオーダーメイドで作ろうとすると、50万円前後かかります。病気の治療費のことも考えれば、親にとっては相当の負担です」

子どもにとっては、病気の治療を終え、あるいは治療を続けながら学校に戻ろうと思っても、髪毛がないことは精神的に大きな障害となる。「ウィッグを提供することで、そのハードルを乗り越えるお手伝いができればいい」と、渡辺さんは話す。

2011年に事業の1個目となるウィッグを提供された16歳の女の子は、「1年半ぶりに自分が笑っている顔を鏡で見た」と喜びの感想を漏らしたという。闘病からの「社会復帰」を彼女はそうした言葉で表現したのだろうが、その笑顔は彼女の周囲の人間も笑顔にさせたに違いない。こ



北海道旭川市で入院中の2人の子どものためにウィッグを提供。採寸から装着時のカットまで病院に向かいに行った



段ボールに納められた全国から寄付された髪毛



ウィッグの提供を受ける子どもの頭に合わせてひとつずつ型がつくれる。この型を元に、ウィッグが作成される



人毛100%のウィッグは自然なツヤやハリがあるのが特徴

れまでに57個(2015年4月末時点)のウィッグを提供し、約40名が提供を待っている状況だというのが、12歳から15歳の多感な思春期にある子どもがウィッグの提供を望むボリュームゾーンだという。

髪毛の受付からウィッグ完成までの
サイクルを自分たちで構築した志高い美容室

このウィッグに欠かせないのが人毛だが、それはすべて一般からの寄付によっている。これまでに、のべ3万人の方々から髪毛の寄付を受けたという。テレビや新聞などで活動が紹介される機会が増えたこともあり、多い月には1500人ほどから寄付がある。なかには若い頃に切ったまま何十年もタンスにしまっていたものを送ってくる御年輩の方もいるという。しかし、そのままでは髪質も色も異なるため、まずトリートメントという処理を施し、毛質や色を統一する必要がある。それは専門業者に依頼するのだが、この過程で時間も費用もかかる。今回のAJOSC

担当者より



提供を待っている
子どもたちに
少しでも早く届けたい

Japan Hair Donation & Charity
事務局長
渡辺貴一さん

マスコミで紹介されたことで髪毛の寄付が増えましたが、トリートメント処理が追いつかない状況でした。そのための費用をAJOSCからの助成で賄うことができ、活動に弾みがつきました。美容師だからこそできる社会貢献活動なので、これからも関係者のすべてがハッピーになるように活動を続けていきたいと思っています。

からの助成は、主にこのトリートメント処理費用として使用された。

実際にウィッグを製作するのは、やはり専門の業者ですが、それまでに渡辺さんたちはウィッグの提供を受ける人の自宅や病室に出向き、頭のサイズを測り、希望するヘアスタイルなども聞き、それをもとにした型作りを行う。その型とトリートメント処理が終わった髪をもとにウィッグが作られるが、完成までは1カ月弱かかる。

さらに完成したものを提供する人に実際に装着してカットすれば、まさに世界にひとつだけのウィッグが出来上がる。寄付をする人の髪を切ったり、完成したウィッグのカットは、この活動に賛同する全国の美容室や美容師が行うこともあるという。

「この美容室を3人の仲間たちで立ち上げた当初から、自分たちの技術でできる社会貢献をしようと考えていました。それでなければ、日本に20万軒もある美容室に新たに1軒加わるだけのおもしろくない。まったくゼロの状態から、自分たちで調べ、交渉し、髪毛の受付からウィッグの提供までというサイクルを築き上げることができました」と、渡辺さん。寄付をしたドナーと提供を受けたドナーのそれぞれの思いは、JHDACのホームページで見ることができる。ぜひ一度、目を通してほしい。ボランティアの原点を感じ取ることができるはずだ。